

問一 ウ 問二 エ
問三 子供の頃、せられた。

【解説】

問一 21行目以降に、「私」の心情が描かれている。アといは文中で述べられていないので不適切。ウは21行目「マスターに対して罪悪感がある」を「後ろめたく思っている」と言い換えているので、ふさわしい。エは、25〜27行目「私が一樹と一緒に水族館に行ったと告げたところで、マスターはなんとも思わないに決まっている」と合わない。問二 10行目に「一樹は別の場所に行きたいようだった」とある。問三 18行目に「それは十年以上経った今も同じ」とあるので、この直前までが「子供の頃」のことが描かれた場面だとわかる。

問一 イ
問二 問近で見ることなどめつたにできない蟬の脱皮を目のあたりにし、緊張して見守っている。
問三 ウ
問四 以前は蟬のぬけ殻を「ごみ」と一緒に置き捨ててしまっていたが、注意して庭中の蟬のぬけ殻を集めるようになった。
問五 娘が自分の趣味に興味を持ったことを知って驚く気持ち
問六 小さいものの失われた生命や、役目を終えて見捨てられるようなものを大切にすることを示した人物

【解説】

問一 6・7行目に「それ(虫)は夜の様々な父の空想世界に連なっている」「生活に密着している」とある。また、直後の段落で「星がこおろぎのミイラを作っていたエピソードを紹介し、「このこおろぎ達も父の文学作品のひとつである」と思った」と述べている。つまり、小さい虫たちと星の文学とは密接に関係していて、小さい虫たちは星の文学において重要な働きをしていたのである。
問二 「息をこらす」は、呼吸を抑えてじっとしているという意味。筆者と母は、めつたに見ることのない、厳粛な瞬間をこわさないよう、また、その瞬間を見逃さないよう、「息をこらしてじっと見ていた」のである。
問三 39行目の「満足な完全な形をしていた」も、ぬけ殻の同じ様子を表していることに着目する。「役目は終わった」とは、蟬がぬけ殻を出してしまつたことを指している。「蟬を抱いている」は、蟬が中にある状態を指している。つまり、——線③は、蟬はぬけ殻を出してしまつてもう中にはいないのに、まだ、蟬が中にあるときと同じ状態である」ということを表現している。

【解説】

才能にも自信を持っていた」とあることも参考にする。自分の才能に自信を持っていただけに、才能のなさを痛感させられたショックは大きく、これまで自分が描いた絵がつまらないものになって、残しておきたくないと思つたのである。
問三 この「震え」は、恐怖や寒さによるものではない。自分の才能のなさに対する、不快な気持ちによるものである。「ぞくぞく」は、「ぞくぞく」あるいは「ぞくぞく」とも表現される、「不快さ」を表す言葉である。
問四 直後に「自分の心の形だ」とある。見えてきたのは自分の心の形で、それは、段落の最後には「自分の心の、想いの一端」と表現されている。具体的には、次の段落の初めにある「映子が好きだった」という思いである。
問五 「亀裂」とは「裂け目」のこと。「亀裂が入る」とは、「二つに裂ける」という意味を表す。直前に「失いたくないと思うほどに、好きだった。だけど傍らに耐えられない」とあり、二つに裂けた気持ちが表示されている。二つの気持ちは、文章の最後でも「傍らにいて自分の凡庸さを突きつけられる痛苦より、映子を失う痛みの方がまだ、マシ」とも表現されている。これらの表現を使つてまとめる。
問六 この文章は、東真の心情を中心に描かれており、東真の内面の声は、11〜12行目、14行目、24〜27行目、44〜45行目、49〜52行目に表現されている。アは「客観的な筆致」、イは「次々と視点と筆致を変化させる」、エは「ユーモアを織り交ぜた」がそれぞれ不適切。

【助詞】

- 1 (1) が・から・を (2) は・で・に (3) を・だけ
- (4) は・の・に・から・が・から・へ・も・な
- 2 (1) ア (2) ウ (3) エ
- (4) イ (2) ウ (4) ウ (2) ア
- 3 (1) イ (2) ア (3) エ (4) カ

【解説】

1 (1) 「が・から・を」は格助詞。(2) 「は」は副助詞。「で・に」は格助詞。(3) 「を」は格助詞。「だけ」は副助詞。
(4) 「から」が二つあるが、初めの「から」は格助詞、二つ目の「から」は接続助詞である。他は、「は・も」が副助詞。「の」が接続助詞。「が・へ」が格助詞。「な」が終助詞。
2 (1) 「が」は逆接の確定を示す接続助詞。
(2) 「と」は順接の確定を示す接続助詞。
(3) 「で」は順接の確定を示す接続助詞。
(4) 「でも」は逆接の仮定を示す接続助詞。「もし勝つたとしても」ということ。

問四 直後に「今までも蟬のぬけ殻は……はき捨ててしまつた。だが……ぬけ殻を見てからは……集めてみた」とある。この部分を使つて、簡潔にまとめる。

問五 星屋は、生命を終えたこおろぎを細心の注意をはらつてミイラにし、大切にしている。蟬のぬけ殻は、そのような星屋にふさわしい「おみやげ」だと筆者は思ったのである。受け取つた星屋は、一瞬その中身を意外に思ったが、すぐに「あのこおろぎの小箱をみたのだな」と合点がいったのである。「はつとすると、思いがけないことにおつかつて驚く様子を表す言葉」。

問六 星屋の言葉の中の「このようなもの」とは、筆者の集めた蟬のぬけ殻を指す。今までは捨てていたものだが、今はそれを大切に扱っている。そうした行為を星屋がほめていたということは、星屋も同様の思いでいるということである。また、問五でとらえたように、蟬のぬけ殻と共通するこおろぎのミイラについて、筆者は、18行目で「小さいものの失われた生命を大切にすると述べている。この二つの内容をまとめて解答を作ればよい」。

【漢字の読み書き17】

- ① つらぬ ② こぼ ③ おど ④ けいりゅう ⑤ かしこ
- ⑥ こうけん ⑦ めすいぬ ⑧ しょうぞうが ⑨ しょうとつ ⑩ ゆううつ
- ⑪ 視界 ⑫ 縦 ⑬ 縮小 ⑭ 処理 ⑮ 署名

【解説】

問一 映子が描いた絵のすこぶりに衝撃を受けている様子
問二 A 映子と比べて自分の絵の才能のなさ
B つまらない絵を残しておきたくない
問三 A 問四 映子が好きだったという思い
問五 失いたくないと思うほどに映子が好きだという思い
問六 映子といると自分の凡庸さを突きつけられて耐えられないという思い

【解説】

問一 東真が、映子の描いた絵を見ている場面は第一〜第四段落に描かれている。そこから、東真の様子を読み取る。すると、第四段落の最後の「息が詰まり、手が震え、足元が定まらない」が、東真の様子をまとめたものとわかる。これらは、映子の絵を見た「衝撃」(4行目)によるものである。それほど、映子の絵は「すこぶり……」(14行目)ものだったのだ。これらの要素をまとめて解答にする。
問二 A 同じ段落の最後に、「映子と比べたとき、自分の持っているものの何と凡庸な」とか」とある。語注にあるように、「凡庸」とは「優れたところがないことだから、こぼ」。「映子と比べたとき、自分には才能がない」ということを表現している。
B 絵を燃やすという行為はどういう気持ちの表れかを考える。前書きに「自分の

1 P 107

問一 エ

問二 A 花火がどんなに綺麗なものと楽しみにしていた

B 大きな音が恐くて我慢できずに泣き出し、花火を見られずに

問三 それでも火々に消える。

解説

問一 直後に「動けない」とあることに注目する。花火の音のすさまじさが恐ろしく、動けなくなっただけである。

問二 直前で「……楽しみにしたのに」と逆接の関係でつないでいるので、実際は期待とは異なる結果となったわけである。その結果に対して「悲しくつまらない」と感じたのである。Aには「期待していたこと」、Bには「実際の結果」の内容があてはまる。

Aは、「のに」の前の内容をまとめる。Bは、泣き出した理由と花火を見られなかったという内容を押さえてまとめる。

問三 「光の繊細な美しさ面白さ」は、線香花火について述べていることを押さえる。「光」という言葉に注目して、前の部分で描写されている線香花火の様子を読むと、「それでも火葉が……閉じるように消える。」の連続する三つの文が、設問で問われている文であることがわかる。

2 P 108

問一 とりの屋敷が火事になって火の手がせまったときに、家を守ってくれたから。

問二 大奥様

問三 ア 問四 ウ 問五 エ

問六 いつまでもケヤキの幹をなでていた

問七 伐られることを覚悟した。

問八 軍二はなん 問九 イ

解説

問一 5〜7行目の大奥様の会話に、理由となるエピソードが述べられている。

問二 9〜12行目で、大奥様が「幼いころ」のことを話しており、その話から桐子が想像している部分なので、この少女は「幼いころ」の大奥様である。

問三 9〜12行目でプランコに夢中になって遊んだ思い出が語られている。父親の愛情に包まれた少女が遊ぶときに出された笑い声なのでアがふさわしい。

問四 18〜19行目「大奥様の話しぶりから、その再会が果たせなかったことは、聞かなくともわかる」とある。桐子は、「聞かなくともわかる」ほど、大奥様の気持ちを感じ取っているのである。

問五 「ケヤキ」との日々を思い出して語っていくうちに、「ケヤキ」と別れる悲しみがこみあげてきたのである。

P 112

〔助詞2〕

1 イ・ウ

2 エ

(1) イ

(2) エ

(3) ウ

(4) イ

(5) ア

解説

1 ア・エは接続助詞で、アは仮定の順接、エは仮定の逆接である。

2 (1) エは逆接の確定の接続助詞、他は主語を示す格助詞。

(2) イは原因・理由を示し、他は起点を示す格助詞。

(3) ウは強調を示し、他は、他に同類があることを示す副助詞。

(4) イは大まかな例示を示し、他は、他を類推させることを示す副助詞。

(5) アは限定を示し、他は、程度を示す副助詞。

問六 30〜31行目に着目する。「いつまでも」からは別れがたい気持ちだが、「なでていた」からは「ケヤキ」への深い感謝と愛情が読み取れる。

問七 32〜33行目に「あの瞬間、木が覚悟したのがわかったと、あとになって軍二から聞かされた」とある。

問八 「いちばんいいところで伐ってやりたい」とは、銘木として生かしてやりたいということであり、そのために「どう伐りたおすか慎重に見きわめていた」のである。

問九 アは「ケヤキを擬人化する」が誤り。「ケヤキの心情」は軍二が感じ取ったことである。この文章は、「ケヤキ」を伐る前の場面だけが描かれているので、ウ・エは誤り。

P 109

〔漢字の読み書き18〕

① おか ② せっしゅ ③ もぐ ④ たくわ ⑤ ちんじょう

⑥ こうとう ⑦ すた ⑧ ばいしょう ⑨ けんぎ ⑩ かたよ

⑪ 遺産 ⑫ 垂直 ⑬ 専用 ⑭ 創意 ⑮ 高層

3 P 110

問一 A エ B ア

問二 一ノ瀬を試合に出してやりたいとは思いますが、医者が無理だと診断したので走らせるわけにはいかないと悔しく悲しく思う気持ち

問三 エ

問四 三年生で総体出場の最後のチャンスになる守屋さんのために南関東大会で走ろうという気持ち

問五 イ 問六 ア

解説

問一 [A]は、一人だけ走ることができずにいるという、一ノ瀬の置かれている状況を押さえて考える。独り言のように言っているのである。[B]は、前後の「無理やり」、「押すようにして」と合うものを選ぶ。

問二 22〜23行目に「どんなに走らせてたくても走らせるわけにはいかない先生の気持ち」とある。この気持ちを具体的に説明すればよい。先生の会話文中の言葉も使ってまとめる。

問三 守屋が、一ノ瀬に「走ってほしい」という意思表示をしたということは書かれていない。一ノ瀬が、守屋の気持ちを汲み取って走ろうとしていることを、守屋は自分の責任だと謝っているのである。

問四 語注と文章の後半に解答の材料になる言葉がある。守屋が三年生であること、「守屋さんのために、連は走りたがっていた」ことを押さえてまとめる。

問五 35行目の「あきらめきれない無念そうな表情」、37行目の「意固地に淡々と逆らい続けていた」などから、一ノ瀬は自分の思いを貫こう(＝守屋さんのために走ろう)としていたことがわかる。その思いが、守屋の言葉を聞いて「ほどけていくよう」になり、

「みんなで、めいっばい走るよ」という言葉を聞き、「周囲の思いやりを受け止める素直な気持ちになって」、「ハイ」と返事をしてるのである。

問六 全体は「俺(神谷)」の視点で描かれている。会話を多用して人物の心情を語らせ、それを「俺」が整理するという表現の仕方をしている。イのような形で作者は登場していない。ウ「客観的に描かれて」はいない。また、先生の言葉や人物の行動の描写をとらえると、「淡々と表現されて」いるわけではないことがわかる。エ「一ノ瀬」の視点では描かれていない。